

特別支援学校における「生徒の主体的参加」を目指す授業の創造（4）

—選択・決定理由の広がりを目指すアプローチ—

早川 透 廣内 絵美 井上 紀知 小坂 眞由美 藤村 彰
須崎 幸代 松田 孝可子 西野 貴司 松永 磨

（京都教育大学附属特別支援学校）

The creation of class aiming at subjective participate in special support school(4)
—An Approach hoping expanse of reasons on self-choose and self-determination

Toru HAYAKAWA Emi HIROUCHI Tositika INOUE Mayumi KOSAKA Akira FUJIMURA
Yukiyo SUZAKI Takako MATSUDA Takashi NISINO Maya MATSUNAGA

2009年11月30日受理

抄録：昨年度報告した、「生徒が自分で選んで、決めて、参加する授業—つくろう！あそぼう！たべよう！」のその後の経過と、それに基づく今年度の「つくろう！あそぼう！たべよう！」の実践の一部を報告した。特に、生徒の選択・決定理由の幅を広げるという視点から行った授業改善について述べ、本授業創造を発展的に進めていくための次のキーワードとして、生徒と教師が関わり合いながら共に主体性を育んでいく授業＝「相互主体的な授業の創造」を提示した。

キーワード：特別支援学校 授業 主体的参加 主体性 自己選択・自己決定

I. はじめに

障害児教育において、児童生徒一人ひとりが主体的に参加する授業創りは普遍的な課題である。しかし、「主体的な参加」とは生徒のどのような姿を言うのか、「生徒が主体的に参加する授業」とは教師と生徒のどのような実践を言うのか、その具体についての教師の認識は多様である。特に近年、一般的に「主体的」と評価される行動^(*)の形成（表面的な現れ）を目指す授業や、「主体的」を「一人で・自分で」と解して教室の物理的環境や補助的手段（支援ツール等）などを整備して「自分で・一人でできること」を目指す授業を、「生徒が主体的に参加する授業」とする実践報告が目立つ。（*周囲から肯定的評価が得られる年齢相応の行動）

少なくとも「主体的」とは、自分なりの思いや考え、感情、価値観などを持つ「主体」が学び・育ち、主体としてのありよう（主体性）が育まれた結果として表わす態度、姿勢であり、物理的環境や支援ツール等によって引き出され、形成されるものではないと考える。発達の結果である「主体的な姿」を行動レベルで目標設定し、行動形成を目指す実践には疑問を感じる。特別支援教育が目指す「主体的」とは何か、「主体的な行動・参加」とは何かについて、生徒（＝主体）の立場に立って十分に議論する必要性を痛感している。

このような状況を背景に、本校中学部では、前年度（H20年度）より「生徒の主体的参加」を掲げて授業創りに取り組み始めた。私たちは、生徒の主体的参加を目指す第一歩として、生徒を私たち教師と同じ、自分なりの思いや考え、感情、価値観等を持つ一個の主体として、また、私たちと同じ生活者として再認識し、尊重してかわることからはじめることにした。このことを具現化するために、生徒が自分の思いを発し、それを教師が捉えて受け止めることから始める授業、そして、生徒と教師が共に授業（生活）を楽しむ形の授業として、生徒の自己選択・自己決定を重視し、自分で選んで、決めて、参加する授業「つくろう！あそぼう！たべよう！」を設定した。

1年次（H20年度）は、秋に6回の授業を行い、その実践を本誌9号に報告した。2年次（本年度）は、夏に2回、秋に6回、「つくろう！あそぼう！たべよう！」の授業を実践した。今回は、1年次の実践から2年次夏の実践までの経過と秋の授業実践を報告し、今後の方向性を整理する。

Ⅱ. 授業の概要

本授業は中学部全生徒（24名）と授業者（9名）とで校内の屋外学習施設「キャンプ広場」を中心に展開する。

1. 自分で選んで決めて参加する

本授業は、13:30 下校の日に「学校生活の過ごし方を生徒自身が選んで、決めて、そこに参加する日」として設定する。生徒は、指導者が設定した4つの活動グループから参加したいグループを選んで、その日一日の学校生活（9:15～12:45）を過ごす。（表1）

表1:20年度秋の「つくろう！あそぼう！たべよう！」の内容（全6回・22時間：4時間×5回、2時間×1回）

第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回
竹ジャンプ	竹ブランコ①	竹シーソー	竹ブランコ②	竹すべり台①	竹すべり台②
かまどの屋根	柱を立てる	柱登り	作業場の屋根	作業場の屋根	作業場の屋根
雑木伐採	丸太橋	丸太橋	一本橋・跳び石	とりで	はしご
栗ご飯	きのこご飯	お好み焼き	ハヤシライス	シチュー	野菜スープ

2. 活動内容の選定

活動グループや内容は、生徒が屋外活動や屋外調理等々で学んだこと・育んだことを生かして参加することを願って、生徒と指導者が一緒になって半日の学校生活を楽しめるような授業を構想・設定する。

◇ 屋外学習題材等での学び・育ちを生かす

中学部の生徒は、校内の豊かな自然環境を生かし、屋外で竹や杉の間伐材などを使ったものづくり（竹コップづくり・そうめん流し台作り・まき作り・階段作り等々）を通じた学習を重ねる。竹の伐採・切断・割り・節抜き・枝払いなどは、自分のはたらきかけた結果が五感を通して跳ね返ってくる応答性の高い活動で、生徒はこれらの活動を通して自分の行為が結果（変化）を生み出すことを楽しむようになる。杉の間伐材は、皮をむくという、竹にはない面白い活動がある。また、竹に比べて変化を生み出すのに大きな力や持続力が求められるが、生徒は竹に変化を生み出せるようになった自信をベースに、間伐材の切断等に挑む。また、屋外調理は、畑で育てた野菜を使う。調理はかまどに火をおこすところから行い、自分たちで作って食べることを楽しみに意欲的に活動する。

生徒はこれらの学習題材で、自ら外界に、素材に変化を生み出すことや作り上げることの楽しさを味わいながら、自分がするという意欲や動くことを厭わない態度を培い、道具を扱う姿勢・動作の学習を通して身体機能や持続力を高め、さらに、友だちと協調・協力することなどを学んでいく。本授業では、これらの学習題材における学び・育ちを基盤に、活動や作るもの、一緒に活動したい人などを選び、自信を持って意欲的に活動する姿、新たなことに挑戦する姿、友だちや指導者と協調・協力して活動する姿を期待して活動内容を設定する。

3. 授業の展開（選択・決定・参加のプロセス）

授業開始は9:15。① 校内の屋外学習施設「キャンプ広場」に集合し、日程や選択情報（作るもの・主な活動・担当指導者など）を知る。② 4つの活動場所を回り、担当指導者の説明を聞き、主な活動を見学・体験する。③ 各自が選んで、決めて、活動の場に向かう。④ 自分が選んだ場・グループで活動する。⑤11時頃、作業活動を終了し、各グループの完成報告・昼食・片づけをして12:45に終了する。

4. 授業の創造・改善

授業を行った日の放課後に授業検討会を持ち、授業者全員で授業を振り返り、改善点などを導き出して次の授業を構想する。

授業中の生徒の様子を数台のデジタルカメラで記録し、その画像を集約して時系列に並べ直して順に映し出し、選択・決定までの様子や、選択したグループでの活動の様子などについての情報や意見を出し合う。生徒たちの多様な選択・決定・参加のありようを見つめながら、何をなぜ選んだのかを可能な限り捉え、生徒の選択理由に応えることによって、生徒たちが役にたったという存在感、楽しかった・選んでよかったという満足感、頑張った・やりきったという達成感を得られる授業づくりをめざす。

Ⅲ. 「つくろう！あそぼう！たべよう！」の実践経過

昨年度（20年度）秋に、1回目の「つくろう！あそぼう！たべよう！」を行った¹⁾。

今年度（21年度）は、夏に「第2回 つくろう！あそぼう！たべよう！」（2回）、秋に「第3回 つくろう！あそぼう！たべよう！」（6回）を行った。次に、第3回までの実践経過を整理する。

1. 昨年度秋の実践から見えてきたこと

昨年度秋の実践において、生徒たちは「自分で選ぶ」ことを目的とするこの授業に、はじめはとまどいつつも、徐々に自分自身で多様な選択肢を作り、活動に参加していった。

道具・使う素材など他題材での経験を基に、好きなことや得意なことで選んでいると思われる生徒、グループを担当する指導者やすでに活動を始めている友だちなどで選ぶ生徒、はじめは誘われて参加するうちに自分の居場所を見つけて自ら活動場所に移動できるようになった生徒など、選び方や参加の仕方は様々であった。

また、自分で選ぶことが難しい生徒には、指導者が生徒の好きそうな・得意そうな活動に誘い、一緒に活動に入った。生徒の中には、少し活動してはすぐに他のグループに移動し、別の活動をする生徒もいたが、「何度も選び直しをしている」と捉えて生徒の姿を認め、その上で、一定の活動をやりきってから選び直しができるようになるための指導・支援をした。

このような、生徒の多様な選択・決定の様子から見えてきたことの中から次の3点を確認した。

- ① 指導者側が用意・意図した4つのグループや主な活動だけが生徒の選択肢になっているのではない。
例えば、一緒に活動する先生や友だちも生徒にとっては選択理由になる。
- ② 経験のない活動や道具などは生徒の選択肢に入りにくい。
- ③ 指導者側が用意・意図したものとそれ以外に自分が比較した対象を含めた中で、自分なりの選択肢を作り、そのなかで順位をつけて選択決定をしている生徒がいる。

また、授業検討会では、毎回の授業の創造・改善について考えると共に、「自分で選ぶ・決める（自己選択・決定）」ということについての議論も進めてきた。その中で、上記③のような生徒の姿に基づいて、「自己選択・決定は、本人が自分の価値観に基づいて選択肢を作るところから始まる」と捉え、その意味で、自己選択・決定を重視する授業は「主体性を育む授業」「社会生活に参加する主体としての学び育ちを目指す授業」であり、次の二つの目標を含むことを授業者間で確認した。

- 「生徒が自分の価値観に基づいて選択肢を作り、その中で順位づけをして選択・決定をできるようにすること」
- 「周囲他者に相談し、意見を求めるなどして、より適切で社会的な方向へと価値観を高めていくこと」

以上をもとに、自分で選んで、決めて、参加する授業をつくる視点として次の4つを導き出した。

《授業づくりの視点》

- 視点1：本人を主体として認識し、生徒の気持ちの動きを捉えたかかわりが、主体性を育むという視点から、満足感、達成感、存在感を得て、自己肯定感を高められるように、何をなぜ選んだのかを捉えて応える授業を創る。
- 視点2：生徒一人ひとりの選択肢を豊かにするという視点から、本授業以外の授業を充実させていく。
- 視点3：生徒一人ひとりの学び・育ちを生かすという視点から、「生活」や「作業」など他題材での一人ひとりの学び・育ちを捉え、選びたいものやことが豊富にある授業を創る。
- 視点4：指導者は共同決定者になるという視点から、学校生活の中で、日々、生徒との関係形成に努める。

2. 第1回（昨年度秋）～第2回（本年度夏）：他題材との関連

昨年度秋に行った第1回「つくろう！あそぼう！たべよう！」以降、特に授業づくりの「視点2」「視点4」を意識し、次に示す「生活」や「作業」などの題材の中で、授業実践を重ねた。

●1年生3学期・「生活」

『距離標識を立てよう』(写真右)：

校内の1周430mの外周道路にマラソン用の距離標識を立てる。「ドリル式穴掘り機」で穴を掘って竹を立て、板材を切ってペンキを塗り数字を書いた標識を取り付ける。穴掘り・看板作りなどの活動を分担・選択し、友だちと協力して活動し、任されたことをやりきる。

『ピザを焼こう！』

耐火煉瓦で窯を作り、小麦粉から作ったピザを焼く。かまど係は、生地ができるまでに、火をおこして窯を温める役割を、責任を持って行う。



●2年生3学期・「生活」

『冬野菜を作った調理』

畑の大根を収穫し、味噌汁・即席漬け・炒め物の中から自分で選んで調理をする。レシピを見て必要な用具類を考えて準備し、自分で調理を進める。

『堆肥・堆肥置き場作り』(写真右)

2×4材を使い、手順表を見、板の向き、切る位置、などに気をつけて、ていねいに作業をして、はめ込み式の堆肥置き場を作り上げる。

『手打ちうどんを作ろう』

手順に沿って、一つひとつの活動の仕方を知り、生地の変化を確かめながら、できあがりを楽しみに、うどんづくりを進める。



●1・2年生3学期「屋外作業（1・2年生縦割り集団）」

『竹の間伐～ベンチづくり』(写真右)

斜面で姿勢を保持して竹を間伐し、切り出した竹の枝を払い、一定の長さに切断してベンチを作る。高さ10m以上の竹を各自が一人で切り倒す。

●2・3年生1学期・「屋外作業（2・3年生縦割り集団）」

『階段づくり』

校内の竹林「たけのこ山」に登る階段を杉の間伐材で作る。間伐材の皮を「竹べら」や「皮むき器」で剥く。一定の長さに切って横木を作る。間伐材を四面斜め切りして尖らせて杭を作り、「かけや」で打ち込む。

『小屋壁面の修復』

竹を切りだして、一定の長さに切る。「なた」を打ち込んで割を入れ、鉄棒を差し込んで2～3人で力を合わせて竹を縦二つに割る。縦に割った竹を「電動ドリル」と「金づち」を使って壁面に打ち付ける。



これらの題材を中心に、この間の学校生活を通して、生徒たちはいろいろな道具を使う活動を体験し、道具の使い方・活動の仕方を学び、自信を持つてできることが増え、自信に基づく意欲的な姿勢や苦手なことにも挑戦する態度が見られるようになってきた。道具を使う・対象に変化を生み出すといった活動自体を楽しむ様子だけでなく、完成を意識して作ることを楽しむ（活動が手段化する）様子なども見られるようになってきた。また、友だちと声を掛け合って活動を進めること、友だちに教えたり手助けしたりすること、自分が任されたことに責任を持ってやりきることなど、協力することを学び、友だち関係が広がったり深まったりしている様子も見られるようになった。授業参加が課題の生徒も、教師との関係が深まって一緒に参加できる活動が増えてきた。²⁾

このような生徒の姿を見つめながら、次回の「つくろう！あそぼう！たべよう！」の授業において、この間の生徒一人ひとりの学び・育ちが、自分なりの選択肢を作り、自分で選んで、決めて、参加することに良い形であらわれてくることを期待し楽しみにする気持ちが高まってきた。

3. 第2回「つくろう！あそぼう！たべよう！」本年度（21年度）夏

7月に2回、「作ろう！遊ぼう！食べよう！」を実施した。自己選択・決定を重視した授業づくりの視点3（＝生徒一人ひとりの学び・育ちを生かすという視点から、「生活」や「作業」など他題材での一人ひとりの学び・育ちを捉え、選びたいものやことが豊富にある授業を創る。）から、生徒一人ひとりのこの間の学び育ちを思い起こして活動内容や作るものを考え、授業を設計し、「屋外調理」と昨年度作って撤去した遊具類を2回の授業で作った。（表2）

表2：第2回「つくろう！あそぼう！たべよう！」のプログラム

1回目	竹遊具「ボヨヨン」 「竹ジャンプ」	間伐材の柱を立てる		屋外調理 「すいとん」
		間伐材の皮むき	穴を掘って柱を立てる	
2回目	竹遊具「トランポリン」 「ぶらんこ」	間伐材の柱を立てる	はしご作り	屋外調理 「ジャンバラヤ」

2・3年生の選択・決定の様子を見ると、多くの生徒が、自分で選んで、決めて、参加していた。今回初めて自分で選んで、決めて、参加した生徒も各回一人ずついた。今回は、生徒の多くがあまり迷わずに決定している様子で、どのような選択肢を作っていたかは捉えにくかった。しかし、生徒の言動から一人ひとり様々な選択・決定理由が推測でき、2・3年生の多くが興味・関心・得意・自信、目的意識、友だち・先生、等、自分の思いを前面に出した選択・決定ができるようになってきたことが感じられた。

この姿を、生徒たちが、この授業に慣れ、選択・決定・参加という流れが分かってきたことを土台にして、日々の学び・育ちに基づく選択・決定・参加ができるようになってきたことの現れと解釈する。そして、一人ひとり様相を異にしながらも、自分の思いに基づいて選んで、決めて、参加するようになってきた姿に、一人ひとりの主体性の育ちが現れていると見ている。

たとえば、この間の学習経験を生かし、自信を持ってできるようになった活動を選択して活躍した生徒、友だちや教師との関係の広がりや深まりを基盤に、友だちに誘われて参加した生徒、友だち関係に支えられて新たなこと（経験のないこと）を選んで挑戦した生徒、道具や活動自体でなく作るもの・作ることを理由に選び、作り上げることを目的に集中して活動を進める姿を見せた生徒、教師との関係の深まりが生き、安心した様子で教師と一緒に参加できる時間・活動が増えた生徒、などなど、前年度の第1回以降の学校生活・学習題材を通した様々な学び・育ちが選択・決定・参加に現れていることが確かめられた。^{2) 3)}

1年生は、自分で選んで、決めて、参加するという初めての経験に戸惑いつつも、穴掘り機・皮むき器・竹べら・手回しドリル・電動ドリル等々のはじめて見る道具や使ったことのない道具、それを使って活動する先輩たちの姿に興味を示して、参加した。いろいろな活動を渡り歩く生徒もいれば、皮むきなどの活動を気に入って疲れ果てるまで取り組む生徒もいた。

そうした1年生に対して、2・3年生がごく自然な形で、誘って一緒に活動したり、手本を示したり、教えてあげたり、活動を見守ってほめたりする姿が随所に見られた。このような先輩らしい姿を見つめながら、次回（秋）には、自分がしたいことを理由に選ぶだけでなく、新1年生との関係で、「（自分が得意な活動を選んで）1年生の手本になって教えてあげる」といった選択も生まれてくるのかもしれないという期待感が膨らんだ。



関係が深まった友だちを心の支えに、新たなことに挑戦！



目的意識（＝ボヨヨンを作る！）の表れ＝竹を一人で立てる



挑戦する1年生に、杭打ちが得意な先輩が見守り、教える。



1年生を誘って竹を切る手本となる3年生

IV. 「第3回 つくろう！あそぼう！たべよう！」の実践

「第2回 つくろう！あそぼう！たべよう！」での生徒の様子を基に、「第3回」の授業づくりを始めた。「第2回」の実践で生徒たちは、自分の思いを前面に出した選択ができるようになってきた。また、選択肢が豊かになったり選択理由に広がりが見え始めた。この「選択・決定理由の広がり」を「主体性の育ちの現れ」と捉え、期待する自己選択・決定の仕方、選択・決定理由の幅の広がりを意図した授業を、秋に作っていきたいと考えた。

1. 選択・決定理由の広がりを意図した授業づくり

自分の思いを前面に出す選択・決定を基に、自己と選択情報をすり合わせた選択・決定や関係性や状況性のなかでの選択・決定へと、選択・決定の理由、仕方に広がりが見えていくことを期待して、授業づくりを進める。

● 「自分の思いを前面に出す選択・決定」

道具・活動・作るものへの興味・関心、友だち・先輩や指導者と一緒に活動したいなど、「自分の思いを前面に出す選択・決定」ができるようになり、自分で選んで決めて参加して、存在感（役立った等）・満足感（やりたいことができた等）・達成感（作り上げた等）を得る。

● 「自己と選択情報をすり合わせた選択・決定」

「自分の思いを前面に出す選択・決定」の積み重ねによって、自分の好きなこと・得意なことを自覚した上で自分がしたいこと・すべきことなどを選択・決定する。自己肯定感を高め、自己理解を深め、選択・決定・参加の主体として自己認識し、そのことによって「自己と選択情報をすり合わせた選択・決定」ができるようになる。

例：「僕は〇〇ができるようになったから(自信)、きっと完成の役に立てる」「私は〇〇が得意だから、後輩の手本になったり教えてあげたりできる」。

● 「関係性や状況性の中での選択・決定」

「自分がすべきこと・期待されていることなど」を考えたり、教師や友だちと相談したりして、「関係性や状況性の中での選択・決定」ができるようになる。

例：「一番やりたいのはコレだけど...」、「本当にやりたいのはコレだけど...」という思いを持ちながらも、「〇君もやりたがっているから、譲って僕はコチラをする」、「みんなが僕のパワーを当てにしているからコチラをする」「3年生だから、得意なこれを選んで、手本になったり、教えてあげたりする」...等々の選択をする。）

*指導者もまた一個の主体として登場し、生徒一人ひとりの自己理解・自己認識の変容を確かめながら、期待感を込めて生徒に働きかけていく。

ただし、生徒が「関係性や状況性の中での選択・決定」ができるようになったとしても、「自己と選択情報をすり合わせた選択・決定」をするときもあれば、「自分の思いを前面に出す選択・決定」をするときもある。その意味で「広がり」という言葉を用いた。

2. 授業の概要

今回は中学部全生徒を対象に、指導者9名で行った。前年度秋と同じく、1:30 下校の日に設定し、9月～10月に6回実施した。毎回、竹や杉間伐材を利用したものづくり(遊具・施設・食器など)と屋外調理で4つの活動グループを設定した。生徒たちが、自分たちの手でキャンプ広場の姿を変えていく楽しさを知り、次回を楽しみにする気持ちを高めていけるよう、作るものを決定した(表3)。

作るものの設定にあたって、①竹と間伐材それぞれを使ったもの、②斜面での活動と平地での活動、③一回で完成するものと完成まで数回かかるものなどを視点として、生徒たちが多様な選択肢を作ったり、活動におもしろさを感じたり、挑戦意欲を高めたりすることができるように考えた。

「はらはら渡り」(杉の間伐材で作るアスレチック遊具)は、1回目を終えた時点での「もっと上まで作りたい!」という生徒の言葉に答えて6回にわたって継続して設定した。作った遊具で遊び、キャンプ広場奥のどんぐり山の景観が変わっていくことを楽しみながら、遊具を大きくしていった。生徒たちに馴染みのある竹を使った活動では、竹をさまざまに利用・加工し、トランポリン・ブランコ・シーソー・トンネルなど、いろいろな遊具

を作ったり、昼食用の食器を作ったり、竹筒でご飯を炊いたりした。この活動は、１～２回で完成するものとして設定した。屋外調理は、食材を切る活動がたくさんある料理を基本に、２年生の冬の「生活」の授業で行ううどんづくりも設定した。

生活や屋外活動などの授業で経験してきた多様な道具を使う活動を取り入れることで自信に基づく選択・活動を、経験のない新たな道具を使った活動を取り入れることで興味や挑戦意欲に基づく選択・活動を期待した。

表３：第３回つくろう！あそぼう！たべよう！の活動内容（プログラム）

①	②	③	④	⑤	⑥
はらはら渡り①	はらはら渡り②	はらはら渡り③	はらはら渡り④	はらはら渡り⑤	はらはら渡り⑥
バランスげた	竹シーソー	竹トンネル①	竹当てもん	竹トンネル②	どんぐり流し
竹飯づくり	竹飯づくり	竹の器づくり	かまどづくり	竹の器づくり	うどんづくり
シチュー	カレー	芋飯・豚汁	うどん	煮込みラーメン	カレー

3. 授業の創造・改善

(1) 選択・決定の機会

● 選択・決定の時間を拡大

作るものや主な活動、使う道具などを写真や文字で示したポスターを、前日朝から廊下に貼り（右写真）、自分でゆっくりと考えて選ぶ時間・指導者や友だちと相談しながら選ぶ時間を設けた。指導者は、生徒の主体としての思いを大切にしながら、「こんな選択をして欲しい」という期待感を持って、生徒がポスターを見ているときに話に加わったり、生徒を誘いかけて一緒にポスターを見ながら選ぶための支援をしたりした。生徒が一旦、その場で決めても指導者は文字化せず、当日の決定時まで何度も選び直しができるように配慮した。



● 授業導入時の選択・決定場面

前回までと同様に、全体説明の後、見学・体験し、より多くの生徒が活動へのイメージを持ち、自分で選択・決定しやすかった。今回は、見学・体験の後、全体説明の場に戻り、グループ毎に希望者を募って（右写真）順番に移動を開始し、活動を始めるようにした。自分の判断で選択・決定し、活動場所へ向かうことができるように、生徒の実態に応じてどのグループで活動したいかを個別に尋ねるなどの配慮をした。



● 活動グループ選択後の選択

グループを選んだ後も、どの活動をしたいか、誰としたいかなど、選択・決定の機会は続く。集まってきた生徒に選択理由（やりたい活動など）を再確認して（右写真）活動を開始し、さらに、生徒の活動の様子を見つめ、生徒の選択理由に応えることに努めた。

生徒たちが、この授業に慣れ、選択・決定・参加という流れが分かってきたことを土台に、さらに選択・決定にかかわってこのような改善を行った結果、次のような変容が確かめられた。

- 見学・体験後、希望者を募る授業者の言葉かけに挙手などで意思表示して活動の場へ行く姿が増え、自分で選択・決定できずに佇む生徒が減った。
- 友だちの強い誘いを断れずに参加したのではないかとと思われる生徒は減り、自分の思いで選択・決定できるようになった。
- 活動グループ選択後にも、自分のしたい活動・一緒に活動したい友だちなどを選んで活動する姿が増えた。

(2) 活動グループを選ぶ時の条件や状況設定

● 友だちと誘い合って必ず二人組で参加するグループ

生徒が、「これがしたい」という自分の思いだけでなく、その思いを実現するために友だちと誘いあって参加することを期待し、さらに、その二人で相談したり協力したりして活動を展開することを期待して、「はらはら渡り」グループの選択条件に「友だちを誘って必ず二人組で参加する」を設定した。

右の写真の生徒2人は、「はらはら渡り」に参加したいという思いを持ちつつ、友だちを誘うということがうまくできない様子で、二人組での参加を嫌がっていた。しかし、それでは希望する活動に参加できないという状況の中、相手の思いを意識しつつ、徐々に互いに誘いあうことができるようになり、一緒に参加するようになった。そして、担当指導者が加わって目標や分担などを相談して決めることで、穴掘りと皮むきを分担して作業を進めたり、カスガイを打つ位置を相談しながら楽しそうに活動を進めたり、競い合って間伐材の皮をむいたりする姿が増えた。



● 指導者なしで自分たちで活動を進めるグループ

自分で活動を進めたり、協力して活動を進めたり、後輩の手本となって自信満々に活動する2・3年生の姿を見て、指導者なしのグループの設定を試みた。3回目の授業で、昼食の食器を竹で作るグループに「指導者なしで自分たちで活動を進める」という条件を設定し、全体状況の中で、「自分がしなければ」「自分が期待されている」という思いを持って選択してくれることを期待した。

しかし、指導者がいないことへの不安や他に希望する活動があることなどから、期待する生徒は選択しなかった。「人が足りず、器ができあがりそうにないので助けてくれないか」という授業者の言葉に答えて、KさんとNくんが取り組んでいた活動に区切りをつけて、竹の器を作りに行った。全体の中で、これは自分がやらないと他の誰にもできないと判断し、行動してくれたようだ。右写真は、二人が、器を作るための竹を切りだして運んでいく様子である。この後、二人で協力して次々と竹を切り、なたで半分に割って30個の器を作り上げた。



● 定員8名

4回目の授業でうどん作りを設定した。事前の生徒の様子から、うどん作りの希望者が多くなることが予想できた。しかし、活動の場、活動量等から人数制限が必要と考え、見学・体験時におおよその定員（8名ほど）を伝えた。この日、3回目の授業で竹の器づくりをしてくれた生徒Kさんはうどん作りをすると決めていた。ところが、見学・体験のところで8人という定員があることを知った。指導者は、彼女に、全体のバランスを見て他のグループに移るといった選択も少し期待した。ところが、彼女はこのような指導者の思いを感じ取った様子で、見学体験時にうどん作りの場を離れようとしなかった（他を見学・体験に行こうとしなかった）。結果的に希望者が定員内に収まり、うどんづくりに参加でき、一生懸命取り組み、とても満足そうな姿を見せた。



私たち授業者が意図したこと・期待したことが、いつもその通りにいくわけではない。また、条件や状況の中で選択できるようになった生徒がいつもそのように選択・決定するわけでもない。選択のバリエーションが増え、選択理由の広がりを見せた生徒でも、「・・・をしたい！」と自分の思いを前面に出した選択・決定をする場合もある。私たちは、毎回の授業ごとに生徒の選択・決定・参加のありようを見つめ、「この生徒もこんな選び方ができるようになったなあ。」と生徒の姿を捉えたうえで、「次はこんな選び方や参加の仕方でもできるようになってほしいなあ」と期待感を持ってこの授業づくりを進めている。しかし、条件・状況を踏まえた選択

ができるようになって、自分のやりたいことを意地でも選ぼうとすることがあることを認め、受け止めながら進めていく必要がある。生徒を自分なりの意図や考え、感情、価値観等を持つ一個の主体として認識し、その主体性を受け止めつつ、私たち教師もまた一個の主体としてはたらきかけていくことが、主体性を育んでいくうえで大切と考えるからである。女子生徒は、私たちにこのことの大切さを再認識させてくれた。

4. まとめ

「第3回 つくろう！あそぼう！たべよう！」の中で、生徒たちはさまざまな姿を見せた。私たち授業者は生徒たちと共に活動しながら、私たちの目に飛び込んでくる彼らのいきいきとした姿や表情を可能な限りデジタルカメラに収めた。そして、授業後に授業者全員でその記録画像を見つめ、情報（その行動や表情が生まれた背景など）を共有し、意見（生徒の姿や表情や感じたこと、その解釈など）を交換しながら授業づくりを進めてきた。今回の6回の授業の記録画像は、1000枚に及んだ。

限られた時間の中で十分な議論はできていないかもしれないが、生徒たちのいきいきとした姿や表情は目に焼き付いている。見学・体験場面で担当指導者の示範に生徒たちの視線が吸い寄せられていく様子（写真右上）、「やったことないし！」とどんどん新しいことに挑戦していったSさんの姿、選んで任された長い竹の枝払いを苦勞しながらも一人黙々と続けたTさんの姿、授業終了時の報告会で「みんなあつまってー」と大きな声で報告したAさんの得意げな姿、初めて自分でかまどに火をつけたときのYさんの最高の笑顔、かまどのそばにあった鉄の柵や大きな鍋を持ち上げて火にかけて周囲を驚かせたJ君の姿、黙々と間伐材の皮をむき続けた1年生のYさん、1年生が竹を切るときに切りやすいようにそっと竹を持ち上げて支えてくれたO君の先輩らしい姿（写真右下）・・・、全ての生徒のさまざまな姿が思い浮かぶ。



毎回の授業と授業後の写真を見ながらの検討会の中で、いろいろな題材・学校生活における生徒一人ひとりの学び・育ちがこの場に生きていること、同時に、この授業の中でも学び育っていることを実感した。生徒一人ひとりが一個の主体としてさらに学び・育つことができるように、第3回の中で見せてくれた様々ないきいきとした姿をもとに、この先の学習題材・学校生活を創造し、その結果が第4回の「つくろう！あそぼう！たべよう！」につながっていくようにと考える。

V. おわりに

本授業「つくろう！あそぼう！たべよう！」を中心に中学部全生活にわたって、主体的な授業参加とは生徒のどのような姿なのか、主体性を育むとはどのような実践をすることなのかを問い続けながら実践を重ねてきている。最初に述べたように、その取りかかりとして、生徒を一個の主体として認識して受け止めることから始め、生活を共にする者同士として一緒に授業（生活）に参加することを目指して、自分で選んで、決めて、参加する授業「つくろう！あそぼう！たべよう！」を設定し、その実践的検討を開始した。

私たちは、この授業について、しばしば「自己選択・決定を重視した授業」という言い方をしてきた。しかし、自己選択・決定を重視した授業は、とにかく「生徒が自分で選んで決めればよい」「自分で選んだのだからそれでいい」となる危険性を孕む。そこで、先行研究を基に、自己選択・決定についての一定の理解を共有した¹⁾。その上で、私たち自身が大事な選択・決定をするときのことを思い起こし、親しい人・信頼できる人に話し、相談しながら決めたり（共同決定）、生活を共にしている人たちのこと（その人との関係性）を考えたり、その時々々の状況などを踏まえて、自分が何を選ぶべきかを考えて決めたりしているのであり、自己選択・決定が自分ひとりだけで行う行為でないことを確認した。そして、本授業では生徒がそのことを体験的に学べる機会を作りたいと考えた。

1 年次、私たちは授業実践を進めながら生徒の姿を通して「自己選択・自己決定」について考え、「自己選択・自己決定を重視した授業」を次のようにとらえた。

「私たちが自己選択・自己決定を行う場合、まず自分なりの選択肢を作り、その中で順位づけをしなから選択・決定を行う。選択肢を作ったり、その中から選択・決定したりする時には、私自身の価値観（何に価値を見出すか・何を優先するかに関する私自身の考え方）が影響する。その過程では、周囲他者に相談し意見を求めるなどして、私自身の価値観の適切さを確かめ、より適切で社会的な方向へと価値観を高めながら選択・決定していく。このように考えるならば、生徒の自己選択・決定を重視する授業は、生徒の価値観を社会的な方向へと高めていくことを目指すことを包含するものであり、社会生活に参加する主体としての学び育ち（主体形成）を目指す授業と言える。」¹⁾

今回、私たちは、本授業に慣れてきた2・3年生が、自分の思いを前面に出した選択・決定ができるようになってきていると捉え、そのことを踏まえて、生徒が社会生活に参加する主体として学び・育つ方向へ選択・決定の理由・仕方が広がっていくことを期待して、アプローチを試み始めた。

教師は、これまで主に生徒の思い（選択理由）をほぼ全面的に受け止め・受け入れ、選択・決定したところでの存在感・満足感・達成感を得て「選んでよかった」と実感できるように、生徒一人一人の選択理由に応じて（目的を共有して）一緒に活動してきた。しかし今回は、その上で、教師が、ところどころで生徒の思いを受け止めつつ、要求したり考えさせたりする主体として登場した。

しかし、それは、期待する姿を引き出すために、教師の思いを強く生徒に押しつけることではない。生徒の「私は・・・をしたい」という思いを受け止めつつ、その上で「でもね・・・」と状況や周囲との関係性を説明して生徒に要求していくと、なんとか納得して応じてくれることがある（180頁。SさんとN君の例）。その際、教師の説明と要求に応じて行った活動の意味（価値観）を実感できる体験になるようにすることが大切である。そうした体験の積み重ねによって、選択理由が社会的な方向へと広がっていくと考える。

たとえば、この事例では、竹を切りだして運んでくることができる生徒は限られており、自分に声をかけられた理由が分かる。切り出しも運びも、切断や割りも、自信を持って行える活動である。結果的に、二人で（指導者の助けはほとんどなしで）たのしくどんどん活動を進めることができ、短時間でみんなが昼食を食べる器30個を作り上げた。報告会では、みんなに「すごい!」と言われ「ありがとう!」と感謝され、たくさんの人に喜んでもらうという貴重な体験をした。

ただし、その次に例示した生徒Sさんに見るように、こうした体験によってすぐに、常に状況や関係性を捉えた選択ができるようになるわけではない。Sさんの思いを代弁するなら、『先生の考えていることは分かるわよ。私に別のグループにいけて言うんでしょ。でもね!わたしは今日は、うどんづくりをやりたいの!!』であろう。それを直接言葉で言わず、うどん作りの場を離れないという行動で主張する姿の背景には、ことばで自分の思いを伝えて実現することの難しさや煩わしさが体験的に積み重なっているのかもしれない。

教師が生徒を主体として受けとめ、その上で教師もまた主体としてはたらきかけていき、その結果、生徒と教師の間に共に主体である関係（相互主体的な関係）が生まれる。生徒と教師が関わりあう中で、互いに感情が響きあったり、思いが衝突したりし、それがそれぞれに跳ね返っていき、生徒も教師も少しずつ変わっていく。そうした過程を経て、私たち教師も生徒も共に、主体性（主体としてのありよう）が育まれていくのではないだろうか。

以上より、生徒とのかかわりの中で、教師と生徒とが互いに主体としてかかわり合い、そのかかわりを経て共に変わっていく授業「相互主体的な授業」が、生徒の主体的参加を目指す授業づくりを発展させていく次のキーワードになると考えている。

文献

- 1). 早川透・山本倫子・廣内絵美. 2008. 特別支援学校における「生徒の主体的参加」を目指す授業づくり(1). 京都教育大学教育実践紀要第9号.115-124
- 2). 廣内絵美.2009. 生徒の選択肢を豊かにする視点からのアプローチ. 障害児教育実践の研究 20 号. 46-54
- 3). 早川透・廣内絵美.2009. 生徒の主体性を育む授業の構想. 障害児教育実践の研究 20 号. 55-64